

● 論 説

中国社会の矛盾と展望

底辺階級からみる中国

—— グロテスクさに可能性を求めて ——

中村 則弘

はじめに

これまで親中派を自認してきた。とりわけ、中国の「老百姓」は大好きである。いい味をしている。その発想や生き方は、ともすれば欧米の歴史観や社会観を覆すだけの内容をもっているとも確信している。この面についての著作もそれなりに書いてきたし、その内容には微塵の揺らぎも感じていない。

ただ、反日運動、資源開発、都市再開発、医療現場などで管見した社会的現実、歴史的な中華世界の理念からみて、どこかおかしい。それとは、あまりに大きく逸脱している。「無理が通れば、道理が引っ込む」とはよく言った

●●●●●

話で、しっかりとした考えをもった人間は、「公論」としては沈黙しているのではないだろうか。状況が相違していることは知りつつも、「陸賈」は、「海瑞」はどこに行っただ、文化的崩壊のもとで中華はあり得ないだろうという切実な思いがある。

さて、中国の展望を考えると、底辺階級の動向は重要な意味を持っている。きびしい社会的現実に直面している人々そのものだからである。また、その検討は世界における貧困、開発の問題を考えると、西欧がつくりだした近代社会に対するオルタナティブを問うときにも、一定の意味をもっていることは間違いない。

とはいえ、こうした課題すべてを一気に取り組もうというつもりは毛頭ない。底辺階級の現状を把握し、そこから

こうした人々の異議申し立てのあり方について追体験的な理解を試み、その史的意義を確認しておこうというだけである。そのなかでは、国家による馴致の失敗と異議申し立てのなかにみられるグロテスクさについて論及することとなる。というのも、この失敗のなかにこそ、形骸化した秩序に対する人間味の発露のなかにこそ、中国再生の新たな可能性があるのではと思えてならないからである。³⁾

一 切り捨て可能な人々としての底辺階級

ここでの底辺階級は、いかなるカテゴリーの人々かということをまず位置づけておきたい。このことについて、いまだに依拠するに足る研究は、陸学芸主編による『当代中国社会階層調査研究報告』であらう。³⁾また、当時の指摘に大きな変化はないとみられる。なお、この研究は大変な労作なのだが、当時、共産党中央指導部からの不興をかったといわれている。再版なども禁止されたという。これは現実を深く、かつ的確に捉えていた証左である。³⁾

さて、この研究においては五つの社会等級から階級カテゴリーを位置づけ、組織資源、経済資源、文化資源の多寡から各等級と関連付けた十の階層構成を設定している。なお、階級という用語を回避していることについて、一つには私的所有と密接にかかわるからであり、いま一つには、

組織、経済、文化にかかわる資源の占有を基準として設定したからである。このことからみて、われわれにとつて理解が容易な社会階級として捉えても、概ね問題はない。

具体的内容について簡単にまとめると、社会階級の上層のカテゴリーとしては、国家高層指導幹部、大企業経営者、高級専門職者、大私営企業主がある。中上層としては、中低層指導幹部、大企業中層管理者、中小企業経営者、中級専門技術者、中規模企業主があり、中層としては初級専門技術者、小企業主、事務職者、個体工商戸がある。中下層としては、個体労働者、一般商業・服務行従事者、工場労働者、農民がある。そして、底層としては、貧困生活状態・就業保障欠落労働者、零細農民、失業者、半失業者が位置づけられている。⁵⁾

これらについて、あくまで概ねではあるが、上層カテゴリーは支配階級、中上層と中中層が新旧の中間階級に該当するとみてよい。ただし、先のカテゴリー区分では、中層をあまりに広くとっている。種々の配慮があつたものと思われる。中下層と底層は下層階級であり、明確な被支配層とみてよい。この底層についてこそ、ここでの底辺階級として位置づけることができる。

それは社会の底層に位置し、文化的資源、組織資源、経済資源が欠如した人々がその主要な構成者である。あわせて、これらの資源を希少にしか持ちえず、上に述べた底層

カテゴリーになっている人間も含まれる。具体的には、都市無職、失業、半失業者、農業労働者の一部、産業労働者の一部、および商業サービス従事者の一部である。^⑥これらの人々は、中国社会において、いわば「切り捨て可能」な集団であるといってもよい。^⑦

ただし、このカテゴリー設定の限界も指摘しておかねばならない。異議申し立てなどの関係では、その内容が直に反映しないことである。階層としての把握が困難ことがらの重要性があまりに大きいことであり、階層を跨いだり、同一カテゴリーであつても状況に大きな相違があつたりしているからである。

それはたとえば、かつての遊民・流民などについてであり、現代であれば農民工として語られたような流動人口についてである。^⑧あわせて、近年明確にみられる、遊民・流民の文化にかかわる思考を行うインテリ層についてである。中華世界はそもそも、儒教にもとづく表の世界と、それ以外にもとづく裏の世界の相互補充でなりたつてきたといえるのだが、こうした文化は裏の側をなす部分と密接にかかわっている。またそれは、歴史的な民衆の異議申し立てや王朝交代とも関連している。^⑨

さて、社会主義政権は文化領域にいたるまで国家と政治に還元しようとしてきた。そこでは、移動にかかわることからは、構造的に捉えられない事象として切り捨ててき

た、ないしは抑圧・弾圧してきた。まさに、近代社会の一面を極端に体現していたともいえる。その一方で、遊民・流民の文化につながる内容が、異議申し立てにかかわる動きのなかにみられたことは、とても興味深い。こうした集団の位置づけについては、別の分類軸を設定し、社会等級とクロスして考えるほかないと思われるが、ここで深入りすることは避ける。ただし、底層、中下層に広がっており、一部は中層、中上層のなかにも跨っていることだけは確認しておく。

二 底辺階級の調査事例から

青海省、チベット自治区、北京市、上海市、福建省、吉林省において二〇〇六年から〇九年にかけ、底辺階級の人々への数十ケースの聞き取りを行った。ここでは、その典型的な事例を示しておきたい。ただし、ここに示すデータについて、少し時間がたっていることは事実である。しかし、その後の別テーマの調査結果から見ると、基本的な状況に大きな変化はないと思われる。^⑩むしろ、問題が深刻化している可能性すら感じている。

(一) 底辺階級の諸事例

事例1 毛沢東と仏への思い（漢民族・病気の婦人）

WS、北京市出身、五六歳の女性である。北京市中心部の集合住宅に住んでおり、心臓病で寝たきりである。住宅は取り壊しの対象となっている。高血圧の合併症に悩む夫、高校三年生の息子と三人で暮らしている。

四歳で母を亡くし、一一歳で心臓手術をうけた。二万円の費用は「街道」が負担してくれた。文化大革命のなかでも一年半、中学に通うことができた。一二歳の時に父も亡くなったので月一四元の補助と就学援助金五〇〇元を居民委員会から得ることができた。このころの居民委員会の人たちは、人柄が良かった。街道の事業所で臨時労働者となったが、一八歳で吐血し、起き上がることもできなくなった。この時は防治主任が入院を勧め、手続きまで行ってくれた。入院費と食事代は全額免除してもらった。七四年にも病気が再発したが、街道は一か月の温泉治療を手配してくれた。それで病状も落ち着いた。

二〇〇三年に病状が悪化した、もはや社会的保障はなかった。一万元の手術と入院の費用は親戚や友人から借りて工面した。医療費の減免措置もあると聞き街道弁事処に行ったが、「癌なら……考えるが、あなたではだめだ」と嫌そうに断られた。それ以後は、病院に行っていない。

薬を買って対応している。

「毛沢東に感謝している。私が生きてこれたのは毛主席のおかげだと思っている」という。また、いまとなっては国に頼ろうとは思わない。「革命の人道主義が私をここまで生き延びさせてくれた」と感じているという。

月収は夫の年金などで一二〇〇元ほどある。しかし、夫と本人の薬代が一〇〇〇元以上かかっている。子供の出費を除くと、食費や光熱費に向けるお金も限られている。子供は「希望工程」から、年六〇〇元の補助を受けている。成績は優秀なのだが、大学に行くには学費免除と奨学金がなければ無理だ。「困難家庭」に認定されていないので、それは不可能だと担当者からいわれている。頑張っている子供が、大学に進学できないことが耐え切れない。

一〇年ほど前から仏教を信仰している。仏事に行くことができるので、家の仏壇を拝むだけである。信仰のおかげで、昔よりも煩惱を打ち消すことができると思う。

事例2 婿に逃げられた一家（回族・不憫な境遇）

MZは青海省A村に居住する回族であり、七七歳、男性である。解放前、西寧の中学に行ったが、二年生で兵隊にとられた。解放後は、この地で農民となった。二〇年前に妻が他界した。その前後に目を悪くし、現在は影が見える程度の視力しかない。三六歳の非識字の娘、小学生の男孫

と同居している。

娘は心臓病を患っており、あまり動き回ることではできない。調子の良くないときは、家で寝ているだけの生活をしている。病院にはお金がないので行けない。この娘に入り婿をとり、生活は何とか成り立っていた。だが、婿は四年前に別の県に逃げた。商売をすると出てゆき、それから一度も帰ってこない。音信も不通である。¹³

約三〇アールの土地で、裸麦を植え、白菜、アブラナ、ジャガイモをつくっている。これらは、自給分だけである。そのほかに、牛を一頭飼っている。これは政府の「貧窮救済プロジェクト」で支給されたものだ。支給品は他にもある。民生局は昨年、二〇〇〇元分の煉瓦を支給してくれた。それで風呂付の納屋を新築できた。小麦粉も年一〇〇斤支給されているし、医療費については「合作医療」ということで年一〇元を納め、六〇%分の自己負担で済ませてもらっている。ただ、現金の支給は全くない。

生活の面で、救済プロジェクトの支給品には助けられている。ただ、現金がないので、医療費の自己負担が払えない。だから、病院には行っていない。昔、医者に診てもらったことはあった。でも、お金がかかるだけで病氣は治らず、何も良いことはなかった。

村は貧しく、金持ちもない。近所からの援助はなく、回教関連の慈善援助もない。援助など、だれも行おうとし

てはくれない。

村の「清真寺」(回教モスク)には日曜ごとに礼拝に行っている。アホン(寺院宗務者)に村民は寄進を欠かしていない。寄進ができればと思っているのだが、いまはお金がない。生きていけない。

生きてゆく中で、楽しいと思うことは何もない。ただ、苦しいだけの毎日だ。一日、一日と過ごせることだけが、希望と言えは希望だ。年老いて自分が死ぬことを考えると、残される娘が不憫でたまらない。¹⁴

事例3 婚姻制度の狭間で(チベット族・篤志家に頼って生きる)

R、四一歳、青海省S村の在住である。S村は青海湖を望む、人家がまばらな丘陵地帯にある。彼女は「非識字」であり、学校に通った経験はない。未婚ながら子供が二人おり、一〇人家族の弟のところに同居している。法律上、内縁関係となっていた夫は、約一〇年前にオートバイを運転中の事故で身体障害者となった。彼は、甥の家で面倒を見てもらっていたが、二〇〇〇年に他界した。

未婚となったのは、財産分与の問題からであった。夫の家は、何らかの理由で分家による財産分割を承認しなかったのである。そのため、事実婚の関係を続ける一方で、夫の家族、親族に結婚と財産分与を働きかけていた。¹⁴ 別居し

ている間、夫は「妻問い」を行っていた。こうした状況下で、夫は事故にあったのだった。この事故について、彼女は補償金を得ることができなかった。

牧畜を手伝いつつ、生活を弟の家族に頼っている。彼女は漢族の廟建築による一日二五元の臨時収入も得ている。こうした収入は安定せず、年に八〇〇元前後に過ぎない。長男は高校卒業後、海南省で働いている。長女は他出して結婚している。¹⁵子供たちの生活も楽ではなく、安定した仕送りは行われていない。

借金はかなりあり、将来への希望は「何もない」とのことである。ただし、年三〇〇四〇回は近くのチベット仏教寺院にお参りに行っている。年四〇〇〇五〇〇元のラマ僧へのお布施は欠かしたことがない。

生活面において、彼女は弟の家族からも、ほぼ見捨てられた状態にある。そんな彼女に援助の手を差し伸べてくれたのは、この地に私財を投じて小学校を建設したノルウェー人の篤志家であった。これまで総額で八〇〇〇元ほどを借りていた。このお金で、生活をやりくりしている。返済は、「息子の出世払い」だそうである。

事例4 社会貢献を夢見ながら(漢族・NPO活動の挫折)

LY、吉林省出身、三四歳の男性である。独身で失業中、北京市近郊の村の民家のベランダを改築した約四平方

メートルの部屋に住んでいる。解雇されたNPOへ出資していた関係で年一二〇〇元の配当金を得ている。足りない分は、貯金を切り崩して補充している。

重点大学であるK大学の専科課程を卒業している。友人三人と二〇〇〇元ずつを出しあい、インターネットの会社を興した。この資金は実家の蓄えをもらったものだった。ただ、この会社は一年で解散する。続けてハミ瓜の販売を三年間行うが、これも失敗する。その後、地元のテレビラジオ局で記者となる。この時は、新聞や電話カードの販売スタンドも経営し、月三〇〇〇元の収入を得ていた。ただ、社会貢献をしたいという願いを強く持ち続けていた。記者時代に河南省のエイズ孤児支援NPOの存在を知り、職を辞し、そこに採用してもらう。月一〇〇〇元の入があつたが、運営方法の対立から結果的に解雇された。それ以後は無職である。

ロックフェラー財団やフォード財団のような慈善団体をつくるという夢をもち続け、企業から寄付をあつめて団体運営を行いたいと考えている。「儒教で世を治め」「道教で身を修め」「仏教で心を治める」ことを人生の抱負としてもっている。思想の自由、生活の平等が大事であり、教育の果たす役割は大きいとも感じている。

(二) 構造化する諸問題

ここに挙げた事例では底辺階級となる道筋を、かなり一般化して示すことができる。あわせて、現段階では、それが構造化したものとなっていることが印象的である。

底辺階級に陥る要因について、できる範囲で確認しておく。まずその前提として、改革開放以後、中国社会主義のもとでの福祉政策が崩壊している状況がある。もちろん、救貧プロジェクトはそれなりに推進されているが、かつての状況とは大きく相違し、まったく不十分である。また、家族や親族について、いわゆる伝統的な関係が大きく揺らいでいる一方で、近代的な関係も形成し得ていない。そのため、セーフティネットとしての互助にも限界をもっている。

被支配階級で下層に位置づけられた人々は、病気や交通事故、家族や親族との関係、会社の倒産や解雇などに問題が生じがちである。さらに、組織的、経済的、文化的資源をそれほど有していない人々は、こうした問題を乗り切るための方策が欠如している。もはやセーフティネットも機能しない。底辺階級へと落ち込む道は不気味なまでに広がっているのである。

さらに、底辺階級は構造化の度合いを強めている。本人の世代内での解決が不可能なことは、説明すら要しないと

思う。さらに、子や孫の世代にいたっても、生活環境や教育の問題により、この境遇から脱することは容易ではない。各事例からみれば、子や孫の代であっても、組織、経済、文化といういずれの資源も欠いている。彼らが到達できるのは、個体労働者、一般商業・服務行従事者、工場労働者、農民などのカテゴリーの下層階級となることであろう。確実に、階級の再生産が行われている。ただし、事例4については文化的資源をもっているため、階級を移動できる可能性は残されている。ただし、結婚すること自体が容易ではない。

こうしたなか、底辺階級のかんりの部分は、もはや救いを信仰にしか見出していないようである。社会生活のなかの理念や規範が解体するなかでは、何らかの信仰生活や宗教活動のなかに求めるしかないことは明らかである。とくに漢民族の事例などからみると、「頼るものがあれば人間関係に、頼るものが無ければ神に」、という志向をそのまま継承しているようである。一方、回族やチベット族の例からみると、イスラム教やチベット仏教は、いまだかなり確固とした宗教性、共同性を残しているようにもみられる。

ここで確認しておきたいことがある。救貧事業をさらに幅広く、手厚く展開したとしても、問題の多くは解決しないことである。第一の事例にしても、奨学金や病気への金銭補助への感謝はあるものの、根本のところにあるのは、

「居民委員会の人たちの、人柄が良かった」のであり、彼女が言う「革命の人道主義」だったのである。第二の事例でも、他県で商売をしている婿が、家に補助金が入ったからといって帰ってくるとは思えない。回族と宗教、商業、回族と契約の問題は何ら解決されないからである。また、補助金のかかりは、まず清真寺への寄付に回るだろう。第三の事例も同様である。多少の補助金で分家の問題が解決するものではなく、彼女の子供たちが親戚から一族として認知されることはないだろう。また、補助金が出て金銭的に助かるのは、ノルウエーの篤志家だろう。そして、補助金のかかりの額は、ラマ僧への寄付に向けられることは間違いない。

三 史的諸理念の崩壊と特殊中国的近代

改革開放政策に至るまで、中国社会主義は一面において、近代世界システムへの抵抗の論理を貫いてきたとみることができ。世界帝国としてのあり方と産業化を、近代的豊かさ⁽⁶⁾と結合しようとしたことは間違いない。そのなかで、市場経済のメカニズムを否定しつつ、毛沢東のカリスマ性と大衆動員、共産党のゲリラ戦術の経験をもとに、急速な発展をめざしたのであった。ただし、産業化や豊かさの面の立ち遅れを自己認識せざるを得なくなった。そこ

で、経済改革以後において、社会主義市場経済などの政策が実施されてきたのである。これは、近代世界システムへの再包摂を意味するものに他ならない。極めて特徴的なことは、反システム運動を基盤においた支配の正当性そのものが、実質的に崩壊したことである。その一方で、近代的な統治システム、諸利害関係の公的調整システムも形成できないままとなっている⁽⁶⁾。

反システム運動としての中国社会主義が、こと社会の最底辺に位置づけられてきた人々の生活問題の改善に一定程度の成果を上げてきたことは、率直に認めるべきである。ただし、それは、歴史的な中華帝国とのかかわりで、根本的な問題をはらんでいた。中国の悲劇そのものと言っても過言ではない。

毛沢東思想は、ある意味で近代的であった。歴史的に見て、できる限り単純化して言えば、中国の価値体系は多重な構成をとっていた。漢族についてみれば、思想理念、民間信仰、祖先崇拜がその対象となり、思想理念としては儒教を中心に、仏教、道教の思弁性の高いものが対応していた。民間信仰は仏教的、道教的、自然崇拜的、伝承的なものなどが融合して多彩に存在する。一方、祖先崇拜は全体の確固とした基盤をなしていた⁽⁶⁾。言うまでもなく、チベット族、回族・ウイグル族、モンゴル族などの少数民族については、多彩な内容の、多彩な構成をみせていた。なお、

イスラム教徒の民族の場合には、その構成は単純なものとなる。

こうした多彩な内容、構成のものを、毛沢東思想という一つの価値体系でまとめあげようとしたわけである。かつての中華世界は、「差序格局」という同心円状の構成をとりつつ、あらゆる多様性を抱合し得たことに基盤があったと理解できる。⁽¹⁸⁾この毛沢東思想が出されたときに、とりわけ大躍進、文化大革命が提起され、推進されたときに、中華世界は決定的に内部崩壊していたのである。

ただし、少数民族の場合には、毛沢東思想の受容に抵抗が大きかった。毛沢東思想自体が漢民族の文化背景を色濃く反映している以上、当然といえば当然のことながらではある。青海省に居住する土族の底辺階級の対象者は次のように明確に語っていた。「顔は東に、心は西に」だったというのである。つまり、表向きは東の北京に従っているが、心はあくまでラサのある、仏の化身がおられる西に向かっているというわけである。ちなみにではあるが、文化大革命中における紅衛兵の一連の行為は、チベット文化の破壊・抹殺を企図したものといっても過言ではない。このことの歴史的総括も行われないうちに、青藏鉄道を利用しつつ、大量の軍隊が睨みをきかせている。あわせて、イスラム教徒の場合、自らが信じる絶対の神と、絶対を主張する毛沢東思想との間で、厳しい摩擦を生じたことは言うまでもな

い。それは、いまだに根深く継続しており、事例2や事例3においても、かなりの葛藤があることは十分にみてとれた。

さて、この毛沢東思想の定着は、また、それ以後の共産党の方針の定着は、近代における馴致の仕組みによって行われてきた。より具体的に言えば、メディア、教育を通じて、支配者の望む価値観、生活スタイルを被支配者層に内面化させ、それに従った行動をとるようにさせるというものである。⁽¹⁹⁾それはフーコーのいう生権力に相通じている。⁽²⁰⁾ただし、現代中国の場合には、それが死権力を交えつつ粗暴な形で行われてきた。ただし、インターネットメディアについては、多分に状況が複雑であることは指摘しておく。

こうした大衆馴致の前提となっているのは、共産党は正義と善を体現した無謬の存在とされることなのである。先に記した内容をさらに展開させれば、党の政策が体現した正義と善を、統治領域において身体化させるということにある。帰結として、メディアと教育は政権の維持の道具となり、あらゆる人間活動は最終的に政治化して把握される。それは中華世界における儒教の役割とは、当たり前ながら、異質なものとなっている。儒教は基本的に、政治道徳に限定されたものである。孔子は民衆について「民可使由之、不可使知之」（民はこれに由らしむべし、これを知らしむべからず。『論語』泰伯）と語っており、こうした発想が官僚統治の基盤をつくってきたことは事実である。し

かしながら、「子不語怪力乱神」（子、怪力乱神を語らず。

『論語』述而第七）というように、社会生活にかかわる多くの重要な領域については、対応を最初から放棄している。よくわかる内容なのである。というのは、多様性の抱合という基本的なあり方に合致したものである。そこでは自己限定ということが重要な意味を持っているのである。異なる文化と共存はしこそすれ、他の文化や多様性を破壊、消滅させるということは、原則的にあり得ない。

共産党による馴致に話をもどそう。その推進が、多くの限界に直面することも事実であろう。何より、共産党の歴史が無謬であったなどとは、日常の生活感覚においてすら合致していないからである。さらに、現状に至っては、共産党の存立基盤そのもののへの疑問が出て当然であろう。特権を謳歌し、金満家となり、海外に資産を蓄積している共産党指導者があちらこちらにいるのである。こうした状況下では、建前と本音の乖離が大きくたちあらわれてくることとなる。

このことはメディアや教育で語られた内容を、道具として使う可能性を生み出してくる。党の無謬性を背後にもっているだけに、実に利用しやすいことは間違いない。共産党の歴史をみても、路線転換、政策撤回の事例には事欠かない。その時々、公認された理念を持ち出せばよいだけである。現実状況とは根本的に乖離しているのだから、批

判や皮肉をそのなかに含めることができる。また、現実の要求を、すり替えて盛り込むことも容易である。「上に政策あれば、下に対策あり」とは、したたかなこうした対応の一面を語る成語ともなっている。

結果的に言えば、人々に対して行おうとした馴致は、建前として内面化できた部分を、道具として利用するということにしか残らない。そのようななかで、二〇〇四年に「和諧社会」ということが政策理念、スローガンとして提起されたことは、極めて重要なことであつたと思える。和諧社会ということとは、民族間や階層間の調和ということが柱の一つとなっている。社会道徳の崩壊が、いよいよ無視できない状況となっていることを示している。本来的に考えれば、和諧ということとは、異質性の承認が前提となる。ただそれは、共産党の存在理由や存在意義と齟齬をきたすことになる。掛け声の内容的重要性和政策目標の陳腐さのギャップは、中国そのものが直面する苦悩を端的に現したもののともいえる。

四 底辺階級とグロテスクさ

底辺階級と密接なかかわりをもつ運動としては、反日デモが印象的であつた。これは漢族を中心としたものだったが、少数民族を主体とした運動にも興味深い内容は少な

らずみられている。ただし、ここは踏み込まないこととする。

そのときの映像で見て驚いたことを鮮明に覚えている。北京のデモなのに、叫ぶ声が相当訛っている。農民工か、それとも外から依頼されてやってきたのか。かなりの部分は、北京定住の人たちではなかったようだ。さらに、都市の片隅にいる外来の人々が、組織立った行動をするとは、よほどのおぜん立てがあったとしか思えない。各事例に示されているように、底辺階級に多く見られたのは「孤立の貧窮」と言つてよい生活状態であった。⁽²¹⁾ あわせて、大学生が出ていないようなのも不思議であった。天安門事件をみても、最初に、先鋭的に動く集団だからである。

こうみると当局からコントロールされていたのだろうし、かなり計算された一種の反日政治ショーを見せられたことになる。ただ、その暴動的な展開などは、当局の想定をこえるものがあつたと思えてならない。ともあれ、反日というのであれば、五四運動以来の元氣な排外学生デモをみたかつた気もしている。全く政治環境が相違する中、学生たちがどう主張するのか、「鼎の輕重を問うて」みたかつた気もしている。

さて、デモの様子をみると、毛沢東主義的なものから、皮肉っぽく言えば社会主義国家右翼といえるものまであつた。そのなかで、デモに参加している人たちの行動様式を

みると、ある意味で魯迅の小説が思い起こされるし、またいまだにそれが重要な意味をもっているように思えて仕方がない。「阿Q正伝」や「藤野先生」である。⁽²²⁾ ただし、多くの部分で決定的な変化が見られているようにも思える。この変化は重要である。

類似した内容をみせた極端かつ明快な例について、確認を兼ねて示しておこう。西安のデモで日本車に乗った人をデモ隊の人間が鉄製の鍵で殴打し、骨折の重傷を負わせた上に、半身不随、言語障害という後遺症を残させるまでの事件が起きた。犯人は河南省から西安にいわざわざ出稼ぎに来ている塗装工(二一歳)であつた。彼はほぼ、底辺階級のカテゴリーの人間とみてよい。

諸報道から知る限りではあるが、犯人の思考、行動スタイルは、「阿Q」と相通じたところがあることは間違いないだろう。一体、その光景をみていたデモの群集たちは何をしていたのだろうか。「藤野先生」のなかの有名な上映されたスライドの光景を思い出す。制止するものは、誰もいなかったようである。デモを監視していた公安当局は何をしていたのであろうか。願うらくは、囁し立てた人間がないことである。

さて、この犯人を含め、デモに参加していた人々を改めて思い起こせば、その少なからぬ参加者は底辺階級の人々であり、犯人がその典型であるように、彼らの多くはやり

場のない閉塞感にとらわれている。これは「阿Q」などとも共通しているし、事例4などとも通じるところがある。だが、先に触れたように、現代のデモや異議申し立てのなかでは、決定的な相違がみられている。第一に毛沢東への、毛沢東主義への追慕という、かつての理念や思想を背景とした主張がみられたことである。こうした追慕の念は、事例1にその一端をみることができた。ただし、この事例からも理解できるように、これからの展望を開き得るものとは考えられない。あつても混乱をまねく一つの引き金か材料程度であろう。第二に愛国心、民族にかかわるスローガンは、メディアと教育による馴致の効果をよく示している。まさに、近代のナショナリズムの一面を体现したような内容である。第三に「性」とかわる内容が、パロディのように織り込まれたものがみられたことである。一見すると、人を馬鹿にしているようでもある。しかしながら、そのように単純な内容とも思えない。

ここで着目すべき重要性を感じているのは、これからに向けて大きな可能性を感じているのは、第三のことがらについてである。性とかかわる内容というのは、つぎのような横断幕が多数みられたことによっている。

「蒼井空是大家的、釣魚島是我們の」(蒼井そらは皆のもの、魚釣島は我々のもの)

領土問題に、アダルトビデオ女優を対比させるといふの

は、世界にも類例をみないだろう。ちなみに、アダルトビデオは中国では違法である。その状況下で、あえて性の問題を出すということは、抑圧からの自由への希求ともとれ、ある意味で人間性の発露ともみえる。政府への批判を内包していることは間違いない。別の穿った見方をすれば、殺すというような「死」ではなく、産み出そうとする「生」への着眼ととらえられるかもしれない。ともあれ、表と裏、建前と本音、陰と陽の両義的世界が見事に体现されている。

ともあれ、そこにはグロテスクさが生きている。これは中国文化と密接にかかわっており、経済的カテゴリーや資源的カテゴリーから把握できるものではない。これこそ、非構造的な領域、移動者・流氓の文化と密接にかかわっているのだらう。また、「江湖」的な知識人の影も感じられる。発想や行動のスタイルからいえば、事例4などはこれに近い。ちなみに、このスローガンを示している人々は、底辺階級から中間部分にかけての部分に属している。

非構造的領域のもつ重要性ということでは、デモから自動車を守ろうとした人たち、中間層部分の人たちの行動もおもしろい。車が破壊されないよう、国旗やスローガンを貼っていたことである。相手が手出しできないある種の「記号」を貼りだしたことである。

これは効果的で、実際、この記号札を貼りだした車は襲

撃を免れていた。そうであれば、それはなぜなのかという素朴な疑問が浮かんでくる。相手が自分たちの主張の賛同者だから襲わないのだから。ただ、攻撃対象は日本製品となつていたのであり、それそのものに向けられていたはずである。あわせて、記号札を貼るという行動が真意からなのか、単なる方便なのか、確認するすべなどあるうはずがない。つまり、賛同者だからというのでは、全く理解できないのである。

ただこの「記号」が記された紙が、魔除けのお札と同様の意味をもっていたとみるならば、彼らの行動はとてもよく理解できる。デモ参加者は、魔除けが貼られた自動車の襲撃を避けたのである。お札は国旗であり、愛国心の「護身符」(お守り札)なのである。この札は、実に効果的であり、「有霊」(霊験あらたか)だったわけである。こうみると、魔除けの相手である「鬼」であり、悪霊はデモ参加者だったわけである。改めてではあるが、アダルト女優をとり上げ、一見パロディのような先のスローガンも、この意味を掛け合わせると、「魚釣島は我々のもの」という一節は、「鬼」封じのお札だったことになる。もちろん、それほど単純なものではないだろうが、こうした意味あいが見え隠れしていたことは間違いない。

こうみてくると、デモに参加した底辺階級にかかわりをもつ人々は、種々の意味で馴致の破綻を示している。当局

もコントロール不能な、見境のない暴行や略奪に走った人間がみられたことは、別の面での証といえる。これは、教育現場で、映画で、テレビドラマで示される誇り高き革命家や献身的な共産党員・八路軍軍人の生き方とは全く異にしている。内面化は建前として利用するという形でしかなされていなかったのである。

一方、パロディ的なスローガンを掲げる人たちについても、それが破綻していることは同様である。ただ、こちらの方は両義性や相互補完性が生きているし、政府や権力への批判も内包している。また、建前としての、表面上だけの「アラベスク」を取り繕った秩序の世界に対する、人間の性の発露としての「グロテスク」さをもみせている。ただし、この「グロテスク」さは、もともと歴史的に中国文化の根幹の一つにもつながっているのである。⁽²⁶⁾また、反骨精神、批判精神とも密接にかかわる可能性をもつ。

とすれば、将来に向けた可能性は、決して閉ざされていない。底辺階級やその境遇に共感する中間的諸階層のなかにある。それは、社会主義の教育の崩壊がもたらした、意図せざる結果だといえる。近代的思想からかけ離れたもの、したたかに、とても重要な内容を示している。だがしかし、現状の内容では先が見えていないことも事実である。これからの展開が待たれるところでもあるし、その可能性は決して閉ざされていない。

おわりに

歴史的な中華世界は、儒教文化を基軸とし、同心円構造をとってきた。本論のなかでも示したが、それはすでに崩壊しているという他ない。とはいえ、世界中に孔子学院が設立されているし、国内でも若者対象の道德・倫理の復活キャンペーンも展開されている。

ただその一方で、天安門広場の前に、儒教は「流毒千年把人害」（千年にわたり毒を流して人を害した）と若者に言わしめた偉大なる指導者のご遺体を莊嚴に安置している。政府の施策の多くは、儒教の精神から大きく乖離している。そして、現代の陸賈は、海瑞は沈黙している。

「己所不欲、勿施於人」（己の欲せざる所は、人に施す勿れ。『論語』顔淵）

「一民之生、重天下」（塩の密造者であれ）たった一人の民の生であつても、天下にとっては重いのだ。

『王安石詩文集』收鹽

こうした志向にこそ、中華世界を支える真髄はあつたはずである。日本の歴史への反省を棚に上げて敢えて言えば、孔子学院の設立にもみられるような、無内容な中華世界の復活を図ることは、国内外の民の困惑につながりかねない話である。その企図は、漢族が歴史的に侮蔑し続けた

「霸道」に行き着くしかないのではないか。新たな形での「王道」の復権こそ求めたいものである。ただ、「霸道」といったときに、歴史的にモンゴル族、満州族が示した高潔さ、賢明さ、そして度量の深さに思い至るべきであろう。また、元朝や清朝の時期における民衆文化の発展には謙虚に着目する必要があると確信している。

改めていえば、必要なことは、中国の歴史に根差した新たな発展理念の構築であろう。とりあえずそれは、世界経済システムと共存、相互補完できるものであつてよい。それを構想する基礎は、非中華的世界、非構造的な世界、北魏、遼、元、清朝など征服王朝の事績の真摯な検討のなかにこそあると思えてならない。

底辺階級と、それにつながる人々の一部が、中国文化に根差した人間性の発露をみせていること、それが両義的補完性、相互補完性に結びついていることは、とても重要なことである。たぶん、こうした発想の先には、西欧の近代とは異なる社会構築の可能性も見出し得るだろうと思えてならない。それはまた、もはや歴史的使命を終えた中華世界観の先にある、新たな何かを捉えているような気がしている。

注

（一）『史記』『酈生陸賈列伝』などを参照。また、中華世界

のあり方については、宮崎市定『東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会』（平凡社、一九八九年）が参考になる。

〈2〉グロテスクさについては、M・バフチンの著作を参照された。

Бахтин, Михаил Михайлович, Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и Ренессанса, Москва, 1965 (ミハイール・バフチン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、一九七七年)。

〈3〉陸学芸主編『当代中国社会階層調査報告』社会科学文献出版社、二〇〇二年。

〈4〉この事実関係は確認済みである。

〈5〉前掲『当代中国社会階層調査報告』九頁。

〈6〉こうした内容については、上の研究報告を受けて出版された、いわば形を変えた続編といえる李春玲の著作に詳しい。李春玲『断裂与碎片——当代中国社会階層分化实证分析』社会科学文献出版社、二〇〇五年、一一四、一二二頁。

〈7〉Frank, A. G., *Crisis: In the Third World*, London: Heinemann, 1981, pp. 125-131. フランクは労働や製品の供給者あるいは製品の需要者として世界システムに参加することが期待できない人々を捉えている。これら底辺階級の構成員たちも、ほぼ同様の状況にあるとみてよい。

〈8〉農民工については、文化部文化市場司・華中師範大学・全国農民工文化生活状況調査課題組編『当代中国農民

工文化生活状況調査報告』（中国社会科学出版社、二〇〇七年）が独自の調査データに基づく分析を行っている。同書一六七―一七一頁によると、内陸農民工の願いは、何より「就労の安定」であり、余暇の過ごし方は「寝る」だけという結果となっている。

〈9〉王学泰『游民文化与中国社会』（学苑出版社、一九九九年）および陸徳陽『流氓史』（上海文芸出版社、二〇〇八年）に詳しい。

〈10〉現在遂行中の「チャイニーズビジネスの実証的研究——グローバルズムとの関係から」（科学研究費補助金(B)海外学術調査)のなかで、類似した地域で聞き取りを行っている。その結果からの推察である。なお、二〇〇六年から二〇〇九年にかけての調査は、「中国の底辺階級に関する実証的研究」（科学研究費補助金(B)海外学術調査)によるものである。

〈11〉このデータについて、初出は中村則弘・栗田英幸編『等身大のグローバルゼーション——オルタナティブを求めて』（明石書店、二〇〇八年、二二―二四頁）である。この内容に加筆修正を行った。

〈12〉結婚時の契約に反した可能性がある。あまりに貧困なため、婿との契約条件を結果的に満たすことができなかったことが一因とみられる。

〈13〉初出は中村則弘『グローバルズムのもとでの中国の底辺階級』（二二世紀東アジア社会学編集委員会編『二二世紀東アジア社会学』創刊号、日中社会学会、二〇〇八年、

二六―二七頁)である。この内容に加筆修正を行った。

〈14〉チベット族の慣習では生活基盤の弱体化につながる分家を、なるべく避けようとする。そのため、男女の合意だけでは、正式な結婚として社会的に認知されない。また、一夫多妻制は、家族面での分家回避の一つの現れである。ちなみに、底辺階級調査と関連して行った村長調査において、チベット自治区の一村長の家は一夫多妻の形態をとっており、村長と弟が妻を共有していた。

〈15〉この結婚も「夜這い」が絡んだものであり、正式な婚姻関係として親族に認められていない可能性がある。

〈16〉このことについては、すでにある程度の論考を済ませている。拙稿「反システム運動の崩壊からみた中国の産業化過程」(現代社会構想・分析研究所年報編集委員会編『現代社会の構造と分析』現代社会構想・分析研究所、二〇〇四年)を参照されたい。

〈17〉価値体系の重層的構成については、すでにかんがりの論考を行っている。拙稿『台頭する私営企業主と変動する中国社会』(ミネルヴァ書房、二〇〇五年、一五九―一六四頁)、および拙稿「渾沌と中国の社会変動(中村則弘編『脱オリエンタリズムと中国文化——新たな社会の構想を求めて』明石書店、二〇〇八年、二〇四―二一三頁)を参照。

〈18〉費孝通『郷土中国』生活・読書・新知三聯書店、一九八五年。

〈19〉Balazs, Étienne, *La Bureaucratie Céleste*, éditions Gallimard, 1968 (エチアヌ・バラージュ『中国文明と官僚制』村松祐

次訳、みずず書房、一九七四年、五八頁)。

〈20〉Foucault, Michel, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, éditions Gallimard, 1975 (ミシェル・フーコー『監獄の誕生』田村俶訳、新潮社、一九七七年)。

〈21〉日本の戦前における都市貧困者の生活とも類似している。「孤立の貧窮」については、柳田國男『明治大正史世相編』(筑摩書房、一九七八年)で用いられている。

〈22〉「阿Q正伝」と「藤野先生」については、つぎの訳書を参照した。鲁迅「阿Q正伝」および「藤野先生」(竹内好訳『筑摩古典文学大系78』所収、筑摩書房、一九七四年)。

〈23〉「江湖」とは、長江と洞庭湖をまたにかけた流氓集団のことである。そのなかには、反体制的な、反骨精神をもつ文人も含まれていた。「水滸伝」などの演義ものの作成と密接にかかわっている。

〈24〉このことに関連する重要な書物は多数ある。とりあえず、窪徳忠『道教の神々』(平河出版社、一九八六年)を参照。

〈25〉人間性の発露ということでは、事例4もさることながら、事例1や事例3にも明確にみられていたことを付け加えておく。

〈26〉井波律子が中国文学のグロテスク・リアリズムについて論考していることは慧眼であろう。ただし、M・バフチンなどの研究内容からみると、その捉え方には若干の疑問が残る。井波律子『中国のグロテスク・リアリズム』平凡社、一九九二年、二二六―二二八頁。